

移動する視点、通路の彫刻



《paste7》
2025年 ミクストメディア H170×W60×D130cm



《Shutter Telegraph》
2024年 鉄 H180×W80×D70cm



《move by us 3》
2025年 ミクストメディア H300×W211×D180cm
撮影：稲口俊太

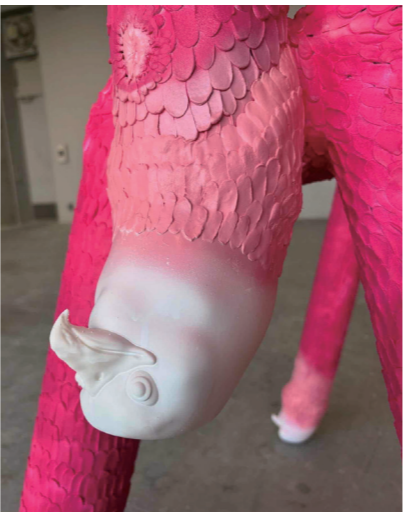
Akiyama Riko

Arakawa Yuka

Kishimoto Natsuko

この空間は、多忙な人々・多様な目的の人々・様々な世代の人々が、通り抜ける場所にある。「広場の彫刻」ではない、「通路の彫刻」は可能だろうか。

秋山理心



《paste7》
2025年 ミクストメディア H170×W60×D130cm

略歴

2004年 静岡県生まれ。
受賞歴：第69回静岡県高等学校美術工芸展 東部地区立体部門 優良賞。

作家コメント

私は口と排泄の機能だけを持つ生き物をつくった。栄養を取り込んで排出する。その循環ができれば生きるといふ最低限の代謝は成立する。しかしそれでは生き続けることはできない。そこで私は同じ生き物を複数作り、それぞれに異なる方向を向かせる。彼らは周囲を監視し、威嚇しながら存在するが、それだけでは互いを支え合えない。最低限しか持たない彼らには他者と結びつく構造がない。だから私が皮膚を伝ってつなげてあげる。そして、ひとつの身体になる。私がいなくても、他者とのつながりによって一つの生命として成立するようになる。

推薦… 富井大裕

世界に対して独自のロジックを持つことはとても魅力的だ。ここで魅力といているのは、危うさと同時に可能性を感じることで、そこに本能的に惹かれてしまうということ、(読みかじりでしかないが) ロシア・コスミズム(宇宙精神)などはその典型ではないだろうか。とある理想にむかって、夢のなかで具体的な構築を試みる。試みは実現しない、だからこそイメージが生まれ、私たちが魅了する。素敵なイメージはいつも不安定だ。秋山理心の作品からはそんなイメージがそこかしこから漏れている。荒唐無稽なアイデアのようで、明確なルールと構造原理が備わっている。というか、原理しかないのだ。鳩の頭と肛門からミニマルな生命の方程式を立て続ける秋山の制作態度は、拍子抜けするほど合理的で、作品展開から窺える思考は淡々と実験を繰り返す科学者のようだ。「芸術において目的が達成されることはあるのだろうか」「秋山の方程式で問題が解けてしまったとしたら」想像するだけで目眩がしそうだ。こんな作品を紹介したいのは当然じゃないでしょうか。



荒川友賀



《Melting Gravity》
2026年 ミクストメディア H50×W182×D92cm

略歴

2004年 福島県生まれ。
2023年 武蔵野美術大学彫刻学科入学。
展覧会：2024年「好一對」二人展 (Galerie JuiLLET・東京)。「※※」二人展 (space sprout・東京)。2025年「BORT」(HIGURE 17-15 cas・東京)。

作家コメント

夢は無意識から届く「内なる通信」であり、通信とは人の思考や情報を他者へ伝えるための手段である。重力もまた目に見えないままあらゆる存在を引き寄せ続けている。私たちは常に見ることのできない力や情報に包まれており、それを夢として人間は受け取っている。夢は最も原始的な通信手段だったのかもしれない。

推薦… 上久保徳子

荒川の作品はアイコニックなものを表す作品に見えるながらも、作品の中で重力や熱、風を感覚的に感じることでできる作品だ。荒川は夢の中の記憶を鮮明に覚えており夢日記をつけているというが、夢の中で荒川の作品が出てきたらどう思うだろうか。どんな大きさなのだろう、どんなふうに動くのか、夢の中でのスケールや状況を考えてしまう。

そんなことを考えながら作品をすみずみまでみてみると、少しづつ動いているような気がして、今自分のいる場所は本当に現実なのだろうかとも思ってしまう。

銀座駅の構内、さまざまな人が目の前の事に追われる中でこの作品を見てみたいと思った。

岸本夏子



《move by us 3》
2025年 ミクストメディア H300×W211×D180cm
撮影：木暮伸也

略歴

2003年 北海道生まれ。
2026年 武蔵野美術大学造形学部 彫刻学科 卒業。
武蔵野美術大学 大学院 入学。
展覧会：2023年「しあわせの再訪 Zoo factory キシモトユキオ+岸本夏子」(犬養ギャラリー・北海道)。無声演劇サークル epa! 第13回芸祭公演「抓芒」代表。2024年「私が排出するもの、あなたが吸収するもの。」(gFAL・東京)。「小平アートサイト」(小平中央公園・東京)。2026年「2025年度武蔵野美術大学卒業・修了制作 優秀作品展」(武蔵野美術大学美術館・東京)。

作家コメント

私たちには踊りが足りていない。気づけば舗装された道を歩いている。私の内には踊っている人がいる。その踊りは身体の奥でうねり、動き形となって現れる。浮遊したい願望と地面に引っぱられる現実。その間に生まれるズレや緊張が動きの源になっている。身体から生まれた形は私の手を離れ、別のリズムや重さを持ち始める。私はそれを動かし、動かされる。その往復のなかで、ものは動きの痕跡となり、新たな動きを生む。その循環の中に私の表現がある。

推薦… 井原宏路

岸本夏子の作品は、鑑賞者の身体感覚を静かに呼び覚ます。金属を軸につくられた装置のような彫刻は、硬さや重さよりも、むしろ軽やかな動きの気配が深い。シンプルな構造からわずかにずらされた軸が予測を超えた複雑な軌道を生み出す。そこには一定のリズムと、そこからこぼれ落ちる逸脱が共存し、豊かな軌跡となる。動く彫刻と聞けばキネティックアートを連想するかもしれない。しかし岸本の作品は機械的な運動を提示するものではない。人の手によって動かされた作品は、重力を受けながら規則と不規則のあいだを揺れ動く。その軌道を追ううちに、身体が作品を動かしているだけでなく、身体もまた作品によって動かされていることに気づく。動きは物体の中だけで完結せず、鑑賞者の想像や身体へと拡張され、身体感覚までもが作品と同期していく。幼少期からダンスに親しんできた岸本にとって、身体は表現の出発点である。彼女は固定された形態としてではなく、重力や運動、身体との関係そのものを彫刻にしている。その作品に触れるとき、私たちは単に物体だけを見るのではない。形と身体、意識と運動が互いに影響し合う場に立ち会い、その「踊り」の一部となる。

本展は、この場所(銀座)この空間(ガラスケース)から新たな彫刻の可能性を考える「実験」です。メトロ銀座ギャラリーの空間を念頭に、彫刻学科研究室がテーマを設定。個性豊かな表現者たちが、学生の中から出品作家を推薦する形で応答しました。多彩なアプローチから選ばれた作家たちは、この実験場で何を試みるでしょう。ここからはじまる、表現のかたちにご注目ください。

2026年7月6日(月) — 8月28日(金)

メトロ銀座ギャラリー

東京メトロ 日比谷線 銀座駅コンコース
B7・B8 出入口付近

主催：公益財団法人 メトロ文化財団
企画監修：武蔵野美術大学彫刻学科研究室